赤城神社と皆川一族

野口地区の西端に位置する旧御前山中学校の校庭脇に、小さな祠がひっそりと佇んでいます。地元の人々に赤城神社と呼ばれるその祠は、歴史を紐解くと戦国の動乱を生き抜いたある一族の姿が浮かび上がってきます。そこで今回は、赤城神社にまつわる歴史についてご紹介します。

◇赤城神社の歴史

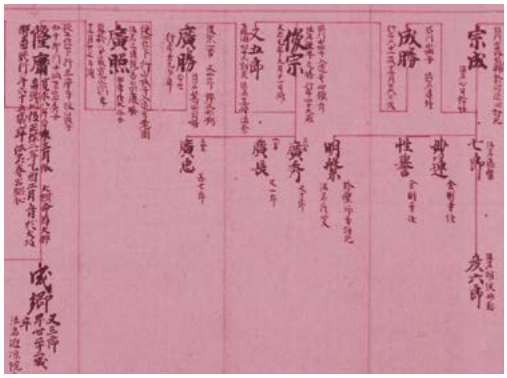
「赤城大明神縁記」によると、赤城神社は天正18年（1590）10月1日の創建と伝えられています。創建者は皆川和泉守廣忠という人物であり、自身が居住したとされる大畑村西金地（常陸大宮市金井）に社殿を建立し、上毛野氏・下毛野氏の祖である豊城入彦命と皆川氏の守護神である天児屋根命の2神を祀って金地大明神と称しました。金地大明神は廣忠の子孫によって代々管理され、毎年10月1日には皆川一族が共同で祭礼を催したそうです。その後、赤城明神と名を改め、天保14年（1843）に西金地が金井村へ併合されたことに伴い現在地へ遷座されました。

◇皆川氏との関係

赤城神社を管理する皆川一族は、戦国時代の末期に大畑村（常陸大宮市野口）へ土着したと伝わります。

▲写真１　赤城神社　社殿

▲写真２　赤城大明神縁記（個人蔵）



▲写真３　皆川系図（栃木県立博物館編「承久の乱 800 周年記念誌　長沼氏から皆川氏へ～皆川文書でたどるその足跡～」から転載）

す。皆川氏の系図によると、皆川氏は藤原秀郷の子孫である小山政光の次男・長沼宗政を祖とする一族で、その末裔である長沼秀宗が下野国皆川荘（栃木県栃木市）を拠点とし、孫の宗成が皆川氏を称したことに始まります。その後、皆川廣照の代に戦国の動乱を渡り歩き、最終的には徳川家に仕えて譜代大名として生き残りました。廣照には廣秀・廣長・廣忠という3人の弟がおり、この廣忠が赤城神社を創建した人物となります。

天正18年4月、小田原征伐に参加していた廣照の不在を狙って上杉景勝らが皆川城に押し寄せ、廣照の兄弟妻子は家臣である白石三河守の屋敷に匿われて難を逃れました。この翌月に廣秀・廣長・廣忠の3人は数名の家臣とともに常陸国へ向かい、大畑村寿命寺の住職・佐竹良信の食客として迎えられたと伝わります。「赤城大明神縁記」によると、白石三河守は佐竹氏一族・白石氏の出自とされており、同族を頼って常陸国へ来た可能性も考えられます。赤城神社の創建はその直後とされていることから、新天地における一族の繁栄を願って神社を建立したのではないでしょうか。

その後、3人は無事に大畑村へ土着し、江戸時代以降は彼らの子孫が大畑村の村役人を務めるなど、村政にも大きく携わりました。現在も野口地区には彼らの子孫が多く居住しており、赤城神社は一族の信仰の対象としてその役目を担い続けています。

【参考文献】
栃木県立博物館編「承久の乱800周年記念誌　長沼氏から皆川氏へ～皆川文書でたどるその足跡～」栃木県立博物館、2021年

（髙橋拓也）

■問い合わせ■　文書館　☎52-0571